

## 素材がわたしに描かせている

紙あるいはキャンバスに、一本の線を描く。次はその線になぞるように次の線を引く、最後まで、この繰り返しで、作品は制作される。シンプルな営みで描かれているように見える高島進のドローイングの作品には緻密な準備と、気の遠くなるような時間が費やされている。

「何かのイメージを表現するために描いているのではなく、鉛筆や、鉛筆などの素材の表現面を手助けするために描いています。素材のために描いたらどうなるのかということを考えています。」

クラシック音楽の世界では、タイトルに「ピアノとフルートのための音楽」などと付けて、その楽器の特性を考えた楽曲が作られているが、それになぞらえれば、高島の仕事は「鉛筆のための美術」とか「筆、インク、紙のための美術」というタイトルが付けられる。実際に彼の作品にはそうしたタイトルが付いている。自らの感情、思索的イメージを絵画にしようとするのではなく、素材の特性を、いかに引き出すかというように作品は制作される。没個性のように見えるが、それに対しては「個性という言葉方をすれば、素材の中にはいろいろな潜在力があると思いますが、素材のどこを強調するかで、個性が出てくると思います。僕の場合は太さが変わるということです。」

高島がドローイングに使うのは、筆、鉛筆、色鉛筆、銀筆、金筆、銅筆、真鉛筆で、それぞれ線を引き始めてから、太さが変わってくところが、表現の大切な要素になっている。例えば、柔らかい色鉛筆の場合は、線を引く前に鉛筆削りで尖った芯にして、線を引きはじめ、線はだんだん太くなっていく。そして一本の線を引くと、また削り直して次の線を引くという制作方法になる。反対に筆の場合は、インクを付けて引き出すと、最初は太くて、筆の含んだインクが少なくなってくると線はだんだん細くなる。あるいは、鉛筆は摩擦が少なく、線の太さの変化が緩やかだというような、それぞれの特性を活かしてドローイングが行われる。

色彩についても、色鉛筆は3本、オレンジ、緑、青紫の光の3原色だけを使う。どの色を使うかはサイコロで決めるという。「サイコロの目の出方の波が表現されているということです。そこに自分の意思は入れません。」サイコロによって決められた色の線が並んで並置混色された画面は虹のような色彩を感じさせるが、それも、計算しないでサイコロに任せる。

支持体の紙については「水彩紙や版画集を使いますが、メーカーはいかにインクがのって綺麗な色ができるかと製造していると思いますが、私は違う使い方をしてメーカーも考えが及ばなかった性格をだしたいというか、紙の潜在力をだしたいですね。」という。

ことごとく独自の方法で素材と向き合い、それを活かした作品を制作したいと続けられてきた高島のドローイングは、すでに10歳の頃の落書きから始まったという。絵画教室で先生から習ってから、それが、病みつきになった。線をなぞっていくと意外な線が見えてくるからだ。

「ただしボールペンかサインペンでしたから、太さが変わらないのもうひとつ物足りなさを感じていました。それがあつ時、気が付いたのは線で描いていると、最初と最後の太さが違つじゃないですか。その違いによつて空間ができる。それを発見してから、これは作品になると思ひました。そこまでに20年掛かりましたがね・」

さて、今回の展覧会では色鉛筆の作品を中心に約20点が出品される。約1年かけた新作に、グツと近づいて、線の微妙な変化と、それが織りなす色彩のハーモニーを鑑賞してみてもうだろうか。そこから画家の息づかいが感じられるだらう。